言葉の排除性に抗う哲学プラクティスの可能性
―バフチン対話理論における
愚者・道化的他者の視点から―

Philosophical Practices as the Rebellion against Exclusion from Languages:
Focusing on the Fool in Bakhtin's Dialogue Theory

久島 玲（東京大学大学院教育学研究科）

【要旨】
バフチンの対話理論は哲学プラクティスの領域でも参照されつつある。しかし、異質な他者とのコミュニケーションという点がバフチン思想の核心であるものの、その代表的なものとして重要な愚者・道化論を踏まえた検討は未だ十分とは言い難い。本論文は、哲学プラクティスが、愚者・道化的な語りが許容された空間を提供していることを確認し、既存の権力構造を破壊・刷新する可能性を有していることを見る。これを通して、言葉の排除性――言葉はコミュニケーションに不可欠である一方で言葉を用いることそれ自体が排除の側面を持つこと――への反省を織り込んだ、言葉に係る教育の在り方を考える。

Bakhtin's dialogue theory is now getting referenced also in the field of philosophical practices like P4C. However, though it emphasizes the significance of communications with heterogeneous others, the research in philosophical practices has not referred to Bakhtin's arguments on the fool yet. Focusing on the fool (the representative of heterogeneous others) in Bakhtin's dialogue theory, this paper reveals the potential function of philosophical practices: philosophical practices break and reconstruct the existing authority. This paper also illustrates the problems of and the possible solutions to exclusion from languages (barrier to languages).

【キーワード】
言葉の排除性、バフチン、対話、愚者・道化、子どもの哲学、ディベート
Exclusion from Languages (Barrier to Languages), Bakhtin, Dialogue, the Fool, Philosophy for/with Children (P4/wC), Debate

1　言葉の排除性という問題

言葉は、他者とコミュニケーションをとるうえで不可欠なメディアである。しかしながら、誰にとっても平等に扱える透明なものではないことも指摘されてきた（ましこ 2014）。たとえば本論文も、日本語で書いている、フォントが明朝体である、そもそも「書く」という手段に頼っている、等の様々な点から読者を制限している。すなわち、言葉を扱うということは、一部の他者と関わるために必要である一方で、別の一部の他者との関わりを断ち切ってしまいもする。そして、後者をコミュニケーションの輪から排除する。まさにシュミッツが述べた通り、「言葉に基準はないが、言葉の使用者が基準を作り、残念なことに、それに従わない人々を沈黙させるために用いる」のである（Schmitz 2013: 139）。本論文は、言葉の排除性という問題を反省する一つの契機として哲学プラクティスを捉え、これをバフチンの対話理論における愚者や道化といった存在に注意しながら検討する。

排除性という観点からの批判は、哲学プラクティスに対しても投げかけられてきた。たとえばビースタは、子どもの哲学（philosophy for children / P4C）について、「ことばや議論、そして概念や会話をうまく処理できる子どもたちにとっては非常に効果がある一方、そうでなく『そこにいない』子どもたちにとっては、はるかにない」と批判している（Biesta 2017: 420-421）。実際、哲学対話の創始者の一人であるリップマンの実践も、論理的な発達を重視している面が強かったことが知られている（酒井 2013: 130）。

一方で、哲学プラクティスがこのような課題の克服に向け努めてきたことも事実である。ハーバーマス批判の文脈で、いわゆる「ロジカル」な話し合いとしての「討議による合意形成へと動機づけられるのは、ある特定の社会層に位置する者たちのみであり、それ以外の人びとはそこに参加する動機を持たない」ことが指摘されてきた（北田 2010: 117）。こうした批判を踏まえ、ロゴスの外部としての〈他者〉の余地を保証することの重要性が再認され、これを達成するための実践として哲学対話をはじめとした「ロゴス的ともパトス的とも言いうるような話し合い」の意義が論じられつつある（丸橋 2019: 70）。

こうした現状を踏まえたとき、ミハイル・バフチン（Михаил Михайлович Бахти́н, 1895-1975）の対話理論は注目に値する。バフチンの言う対話は、複数人が集まって話し合いをすれば良いというものではなく、異質な他者とのコミュニケーションを通して既存の枠組みが破壊・刷新されることに重点が置かれている。しかし、バフチン対話理論は、ソクラテス、ヴィゴツキーという P4C の二大源流に対する第三の系譜として遅れて参照され始めた経緯からか（Morteza & Soudabeh 2018: 56）、哲学プラクティスの領域において十分に検討されてきたとは言い難い。

とりわけ、哲学対話などとの関わりにおいてバフチンが参照されるときには、「応信性」や「宛名」といった要素はすでに拾われている一方で（河野 2014: 6）、「愚者・道化（fool）」については未だほとんど言及がない。愚者・道化の理論は、主に文学の領域において検討されてきた一方、教育学には導入されていないと言ってよい。実際、バフチンを用いた教育実践や、バフチン対話理論に基づいたラブレー読解から導かれた教育論でも、伝統的・権威的で厳粛な公式の世界とは別の、民衆による非公式の「第二の世界」（＝「グロテスク・リアリズム」）的な視点が欠落しているとされる（遠藤 2021: 7-8）。詳しくは次節で記すが、この視点は上述の言葉の排除性の問題を考えるにあたって重要である。

そのなかで、田島（2018）は、愚者や道化といった異質な他者にも言及しながらバフ

チンの対話理論を概説し、教育実践への接続可能性も検討しようとした論考であり、唯一無二のものと言える。ただし、実際の哲学プラクティス実践までは射程に含んでいない。

以上から、バフチン対話理論が哲学プラクティスにとって多くの示唆を含むものでありながら十分に検討されていないことがわかる。先行研究では特に、①愚者・道化を主題としたものがなく、②愚者・道化に言及していても実際の哲学プラクティスにまで還元できてはいないという、2 つの課題が残されていると言える。そこで、本論文は、バフチンの対話理論のなかでも、伝統的・権威的な公式の世界から排除されてきた存在としての愚者・道化的な語りに焦点を当て、実際の哲学プラクティス実践を見直し評価する。換言すれば、本論文は、バフチンの対話理論を手がかりに、以上に見た言葉の排除性という問題への反省を織り込んだ教育の在り方としての哲学プラクティスの意義を考察する。

したがって本論文は以下の構成を採る。はじめに第 2 節で、バフチンの対話理論を参照する。言葉の排除性という問題に抗う契機として、これまで伝統的・公式的な枠組みから排除されてきた愚者・道化的他者と呼ばれる人々の語り――「言葉」という規範から外されてきたもの――に注目する。この視点を踏まえて、第 3 節と第 4 節では具体的な実践例を観察し、哲学プラクティスの意義を考察する。第 3 節では、哲学プラクティスの代表的なものとして哲学対話を取り上げる。第 4 節では、哲学プラクティスとは対照的なものとして扱われることの多いディベートを取り上げる。これら実践の分析を通して、既存の構造の破壊や刷新という機能から、言葉の排除性への反省を織り込んだ教育の可能性として哲学プラクティスを捉えうることを論じ、最後の第 5 節として本論文を結ぶ。

2　バフチンの対話理論

なぜ本論文がバフチンの対話理論、なかでも愚者・道化といった存在に着目するのか。先行研究の射程という外在的要因は、第 1 節ですでに述べた。では、バフチンの対話理論がどのようなものであり、なぜ注目に値するのかという内在的要因を、第 1 節で確認した言葉に係る問題関心から以下で見ていく。

まず、バフチンが言葉に大きな関心を寄せていたことが指摘できる。実際、愚者・道化論という領域のなかでも、バフチンはこれを言葉との関係において捉えるという固有性を持っている。愚者・道化それ自体というよりは、愚者・道化の抱え込む両義性や、その生きる環境に関して、「混淆的言語形式の、刮目すべくフォルマリスム的な精緻な分析を行う」と評されるとおりである（高山 1987: 242-243）。

そして、言葉の排除性という問題を考えていたことも指摘できる。バフチンは研究の対象を言葉に設定しながら、以下のように論じて、その性質について注意を促す。

> 記号に反映されている存在は、ただに反映されているのではなく、記号のなかで屈折させられている。（…）この屈折は、何に起因しているのであろうか。それは、ある記号的集団の枠内におけるさまざまな方向の社会的利害の交差、つまり階級闘争に起因している。（…）記号は階級闘争の舞台となっている。（マル: 38）

バフチンは、言語それ自体の体系に関心を向けた言語学を立てたソシュールに対置される形で、言語の背景に潜む権力性に注意を向ける必要を明確に指摘しているのである（西口

2012: 51)。バフチン以前にも、言葉として現実化はしなかった「コンテキスト」や「外-言語的状況」と呼ばれるもの、すなわち言葉の背景という要素の重要性に関する議論はあったが、それらを言葉と切り分け、あくまで外的なものという位置づけに留めていた。従来そのように捉えられていた外-言語的な要素を、言語の意味を理解するために不可欠なものであり、言語の内側に位置づけられるとしたのが、バフチンであるという（トドロフ 1981=2001: 77)。つまり、言葉の背景という外-言語的な要素もまた言葉そのものの理解のために必要不可欠であり、言葉の内側に入ってくる要素であるとする転換を行ったという点で、バフチンは言葉の排除性の問題を考えるにあたって重要な位置を占める(1)。

以上のような、言葉と、その排除性に係る問題意識から、バフチンは「権威的な言葉」を批判する。「権威的な言葉」とは、伝統的に用いられ「一般化している視点と評価」される〈共通言語〉のことを指しており（言葉: 85)、「階層秩序的過去と有機的に結びついている」(Ibid.: 160)。具体的には、バフチンは次のように批判している。

> 権威的な言葉は不活性なものであり、その意味は完結し、硬化している。それはそのいかめしい外貌によって孤立しており、自己に対してそれを自由に様式化するような敷延を許さない。(Ibid.: 163)

つまり、排除の性質を抱えたまま、凝り固まってしまっていると言うのである。こうした言葉を受動的に理解するだけでは、特定の文脈・視野のなかに留まり「領域外に連れ出すことができない」ため、「新しいものも、新しい対象的・表現的契機も導入することができない」(マル: 48)。ゆえに、いつまでも特定の視野から構築された言葉のままとなり、その視野から排除された存在は排除されたままとなってしまうのである。

この問題にどのように向き合えばよいのか。バフチンは、「不協和音」「矛盾」等の挑発的・論争的な要素に対話の契機を見出しており、これによって「異なるコンテキスト、異なる視点、異なる視野、異なる表現的アクセントの体系、異なる社会的〈言語〉の相互作用」が生み出されるという（Ibid.: 49-50)。「他の言葉から孤立した不動の状態にとどまるものではな」く、「緊張した相互作用を開始し、闘争関係に入る」ことで（言葉: 165)、すなわち、当然に共通のものと見做されている権威的な言葉を受動的に理解するのではなく、権威的な言葉と排除されてきた言葉との間で生じる「不協和音」「矛盾」「闘争」といった摩擦に注目して言葉を動的なものと捉えることで、権威性の解体と排除の克服に向かう。

権威的な言葉に挑戦する、公式の世界から排除されてきた存在として、バフチンの対話理論のなかでも注目に値するのが、「愚者」や「道化」と呼ばれる存在である。バフチンは、愚者と道化の機能について、次のように説明を与えている。

> かれらには、この世界で他者であり異質な存在だという、大変独自な特性・固有の特権がそなわっている。かれらは、この世界に現にある実人生のなかの、いかなる地位・いかなる立場にもつながってはいない。また、いかなる地位を築こうともしない。かれらの関心事はありとあらゆる立場の裏面と嘘とを見抜くということ（時空間: 157)

世界を束縛する伝統や慣習は、支配的な公式の世界で構築されたものであるため、「この世界」＝公式の世界から排除された非公式の世界で生きる愚者や道化には、この権威性の根源を理解できない(2)。ゆえに、この「無理解」によって権威の絶対性を揺さぶり「高尚な現実を〈異化する〉」(言葉: 256)、すなわち「彼自身がまさに無理解者として存在することによって社会的な約束事の世界を異化する」のである（Ibid.: 260-261)。バフチンは、こうした暴露・公然化の権利ゆえに、「因習的なもの・慣行にもとづくものとの闘い」において愚者・道化を「他の例にないほど重要になる」と位置づける（時空間: 163-164)。

本節で確認したバフチンの対話理論における愚者・道化の機能をまとめると次のようになる。「階層秩序的過去と有機的に結びついている」権威的な言葉は（言葉: 160)、伝統・因習性を構築することで公式の世界をつくりだし、そうでないものとの間に境界線を引くことで排除を引き起こす。バフチンの対話理論における愚者・道化的な他者は、権威的な言葉に対して「ちぐはぐなことば」(Ibid.: 31)、「他者のイデオロギー的言葉」（Ibid.: 164)、「一般には認められない言語」(Ibid.: 261）をつきつけることで、当然と見做されてきた権威、伝統、公式の世界を揺さぶり、これを解体・刷新する。

次節より、以上で確認した、バフチンの対話理論における非公式の世界の住人の語りとそこから拓かれる解放の契機という視座から、哲学プラクティスを見る。

3　哲学対話における愚者的な語り

第 1 節で触れた議論批判という背景もあり、近年哲学対話が注目を集めている。哲学対話では、定型やスタンダードといったものがないとされており、ゆえに誰でも自由な語りを行うことができると標榜される。本節では、こうした対話という哲学プラクティスのなかに、権威的な因習性に「無理解」をつきつけ異化する愚者的な語りを看取する。

森田が観察したお茶の水女子大学附属小学校の「てつがく」の授業では、「地球はなぜあるのだろう？」という問いのもと、地球ができた過程や理由について対話が起こっていた(3)。そこで子どもたちが、「理科的に正しい」説について「どこかそれだけでは納得できないもの」を持ち（森田 2021: 35)、この「ある種の違和感」を「奇跡（的)」という言葉で表現していたことが紹介されている（Ibid.: 39-40)。「てつがく」の時間の対話においては、わからないものを「わからない」としたり、「奇跡」という論理的とは言えない形で表現したりしており、こうした表現の形態が拒絶されない。このように、無理解を無理解として提示することは、権威的な既存の構造を揺るがす愚者的な他者性の顕現と呼べる。

「それは問題の次元が違う、と言って退けない」ことも指摘されていた。たとえば、自由／不自由について話していた際に、良い／悪いという別の切り口からの反論が飛んできたが、児童は「戸惑いながらも」「この反論を受け入れそれに応答する」道を選んだ（Ibid.: 88)。また、お金持ちは幸せかという問いに関して、お金持ちは「お金を使い切ってしまうから幸せではない」という意見が出るが（Ibid.: 140)、これを「それは『お金持ち』ではなくなっていて、問題の定義から外れているのでは」などと棄却はしないのである。

こうした場面に見られる語りは、一般的に「正しい」とは言えないものである。森田も指摘しているとおり、「論理学など学んだことのない子どもたち」によって織り成される

話であるため、「首尾一貫した整然としたものではありえない」（Ibid.: 201）。こうした、必ずしも妥当や適切とは言えないような語りも許容されていることが、規範からうまれる排除性についての反省を織り込んだ語りの場を構築するために重要なポイントを有していると考えられる。実際、森田（2011: 115-117）では、学校の教師の「絶対」性、そこから生じる「良い子」や「普通の子」といった規範に悩まされる子どもたちの様子が描かれていた。たとえば、ある 12 歳の児童は、「大人とは、（…）生のための社会を構築し、その社会が維持されるためのさまざまな良識を作り上げてそこに安住する存在で」あり、そこで構築された言説は「きれいごと」にすぎないと、考えていたという（Ibid.: 93）。こうした現象は、換言すれば、言説の資源を占有してきた公式の世界の側が、「権威的な言葉」に依拠する因習性を設定し、そこに整合的でない語りを排除してきたと表現できる。対して、「首尾一貫した整然としたものではありえない」子どもたちの語りは、こうした従来構築されてきた議論の仕方に反旗を翻し、排除の問題への反省を織り込む機会を備えていると評価できるのではなかろうか。

永井は、リップマンが非形式的誤謬を列挙した「妥当性の一覧表」を作成して用いていたことを挙げながら、「誤りを『正す』『指摘する』といった方向で用いるとなると『脆さ』が現れる可能性が生じる。それは、他者によって指摘された『誤り』を認められなかったり、他者が犯した『誤り』を攻撃的に指摘したり、他者を『正しさ』へ向かわせようと強制したりするような、理性の脆弱性でもあり、同時に、他者に『誤り』を指摘されて苦痛に感じる、間違えを犯した気になり恥ずかしさを抱く、『誤り』を恐れて発言できなくなってしまうなどの、可傷性をも意味する(4)」と指摘している（永井 2019: 41）(5)。こうした議論も、前段落までで見てきた、バフチンの言うところの愚者的な他者による語りの機能の整理と、整合的であるように思われる。

4　ディベートにおける道化的な語り

哲学対話などの実践は、一部、ディベートを批判することで、そのコントラストによって自らの位置と価値を明瞭にしてきた面もある。たとえば梶谷（2018: 56）が、「ディベート、批判的な論争は、専門家、議論好きな人、負けず嫌いな人、頭が良くほめられたい人どうしでやっていればいい」と記していることが象徴的である。つまり、ディベートは、第 2 節で扱った言葉でいえば、基本的に権威の側に属する排除的なものとして理解されてきた。しかし、ディベートのなかにも、言葉の排除性を意識した試みが存在する。本節では、クリティーク（Kritik）と呼ばれるこの種の議論――いわばディベートのなかの哲学プラクティス――における道化的な語りを看取する。先取りして含意を記せば、これまで述べた問題関心に即して言葉の排除性に抗う語りを考察するとともに、上記のような哲学対話とディベートとの対立を煽るような言説（こうした言説は、ここで「専門家、議論好きな人、……」等と呼んでいる、自分たちと異質な他者との邂逅・対話の可能性を排除してしまっている）を反省し、哲学プラクティスのより良い布置をも検討することで、哲学プラクティスの意義をさらに明瞭にする（このことは第 5 節、本論文の末尾で記す）。

ディベートでは多くの場合、論題の政策を導入した場合にどのようなメリット／デメリットが生じるかというアウトプットの部分に着目して議論することで当該政策の当為を考える。一方で、このような従来的な仕方とは別の議論形式がクリティークである。クリテ

ィークは、当該政策の思想・イデオロギーや、当該政策が論題として選ばれたことなど、論題の政策より手前の前提や背景を対象として当為を考える哲学的な議論とされる。

本節では、2014 年の CEDA 大会を例に見る。英語ディベートの世界一を決める大会の一つで、タウソン大学が黒人女性からなるチームとして史上初の優勝を果たした年である。論題は、「米国連邦政府は、『標的の殺害』『無期限の勾留』『サイバー攻撃』『敵対行為に国の軍を投入すること』のうち 1 つ以上において、大統領の戦争権限（war power authority）に対する法定の、および／または司法上での、制限を、大幅に強化すべきである。」であった（CEDA 2014）(6)。しかし、タウソン大学の 2 人は、“war” は “war” でも「より逼迫した課題は、政府と貧しい黒人コミュニティとの間で繰り広げられる闘いだ」と主張し、こちらの問題を優先して論じるべきだと主張したのである（Kraft 2014）。

すなわち、提示された「大統領の戦争権限」という論題は、“war” という言葉を白人エリート支配層の視点から見た「権威的な言葉」であり、これに対して、排除されてきた黒人の視点から “war” を見た時に見えてくるものを提示することで、権威的な伝統・慣習の世界を異化するのである。一見突拍子もない議論だが、これはバフチン的に言えば、権威的な伝統・慣習を理解していない（あるいはそのように装う）という道化的な視点から、「高尚な言語や名称を暴露的に歪曲して置き換える」試みとして解釈することができる（言葉: 260-261）。“war” という言葉が社会でどのように受け取られるかという意味の生起の場面、すなわち言葉の〈創造的段階〉に踏み込むことで、「言葉の中にその新しい諸側面を開示する言葉への鋭く対話的な関係」を拓いているのである（Ibid.: 174-175）。

以上では語った内容に着目したが、以下の二点において、語った形式も注目に値する。

第一に、決勝戦で否定側のタウソン大学と対峙した肯定側のオクラホマ大学が、こちらも黒人の女性たちからなるチームだったのだが、次のようにラップの歌詞（2pac の “Keep Ya Head Up”）を引用して歌い上げることを第一声として試合を開始したことである。

Some say the blacker the berry, the sweeter the juice.
I say the darker the flesh then the deeper the roots.
I give a holla to my sisters on welfare.
2Pac cares, if don't nobody else care.
（誰かが言ってたよ、実が黒く熟れたほうがジュースは甘くなるとか。
俺に言わせりゃ、色黒い方が新鮮で、根を深く張るのさ。
生活保護で暮らしてる ねえちゃんたち、こんにちは、よく聞きな、
支えてくれる人が誰もいなくても、俺 2Pac が孤独にしない。）

黒人や女性を念頭に置き社会的弱者を歌ったこのラップを引用することで、自分たちの立場を明瞭に示すことが意図されていたと言える。

第二に、整っているとは言い難い語りも含んでいたことである。たとえば下の一節は、文法的に正確な文になっているとは言えない。また、“dink” 等の語は俗語である。換言すれば、一般に規範とされる General American English から距離を置いた語りである(7)。

Uh, man's sole jabringing object disfigure religion trauma and nubs, uh, the, inside the trauma of representation that turns into the black child devouring and identifying with the stories and into the white culture brought up, uh, de de de de de, dink, and add subjectively like a white man, the black man!

（代理・表象（representation）のトラウマの中で……黒人の子どもが、白人文化の中で同一化されて、白人と同様の主体性を付与されてしまうのです！）

以上の二点は、いずれも、公式の世界では適切ではないとされてきた語りの形式を採用している。「道化とは一般的には認められない言語を語り、公認の言語を悪意をもって歪曲する権利を持つ者であ」り（言葉: 261）、これを通して既存の権力構造を破壊・刷新するのである。ほかの非エリート州立大学のディベート関係者が、「今となっては、従来の議論の進め方は、特定の人々をそのほかの人々よりも優遇してきたという認識が得られています。」「議論は、必ずしも専門家や書かれた論文に裏付けられる必要はなく、生きた経験からも現出しうるのです。」と語り、ディベートスタイルとコミュニティの変容に勇気づけられたことを明かしているように（Kraft 2014）、排除されてきた人々の居場所を新たに創設する可能性を秘めているのである。

5　権威解体的な語りの意義と課題

第 2 節でも確認したとおり、権威的な言葉が、伝統・因習性から公式の世界を規定し、そこからの排除を起こす。これに対し、愚者・道化的な他者は「ちぐはぐなことば」（言葉: 31）、「他者のイデオロギー的言葉」（Ibid.: 164）、「一般には認められない言語」（Ibid.: 261）をつきつけ、一般に当然のものと見做されてきた権威、伝統、公式の世界を解体・刷新する。哲学対話をはじめとした哲学プラクティスには、このような言葉の排除性への反省を織り込んだ教育実践の可能性が認められた。すなわち、必ずしも「正しい」「妥当な」「適切な」語りでなくてもよいという哲学プラクティスの側面は、言葉を用いるうえで設定されてきた規範により排除されてきた人々の居場所を創出しうる。

本論文は、以上の結論を得ることができた。一方で、次の課題も残されている。

第一に、愚者・道化論という領域のなかで、本論文はバフチンのそれしか扱っていない。そのため、愚者・道化的他者の機能に記述が集中し、たとえばその定義についてはあまり議論していない。この点は、バフチンの理論のもつ限界であるとも言えよう。というのは、第 2 節でも言及したとおり、バフチンの主眼は「フール的存在［引用者註：愚者・道化］プロパーというよりは」、その生きる環境やそこで展開される言語形式にあったためである（高山 1987: 242-243）。この課題は、どのような者が愚者・道化的他者として顕現することが可能かという点で、教育実践に係ってくる。たとえば、教師があえて的を外した問いかけをして授業中の議論を攪乱させることは、道化の仮面をかぶって本論文で見たような語りを誘発するポジティブなものとして解釈できるのか、それとも教師の権威性の仮初の隠蔽に過ぎないのか。愚者・道化の定義によっても見方が変わってくる点であり、堀越（2020）のような教師の権威性に係る議論に接続される可能性が残されていると言えよう。

第二に、当然に意識されることとして、あらゆる規範を破壊する行き過ぎた相対主義に

陥らないかという懸念がある。ただ、本論文は、すべての場面ですべての規範を相対化せよと主張しているのでは決してなく、学校教育のなかにこのような語りが許容される空間もまた設けられてよいのではないかという示唆は可能ではないかと考える。バフチンによれば、「中世の僧院の生徒、後には大学生は、休暇の間は安心して一年の間自分の敬虔な学習の対象であったもののすべて――聖書から学校の文法書に至るまで――を嘲笑した」という（言葉: 345）。権威的な言葉で科学的・伝統的な内容を教授する学校教育のなかで、哲学プラクティスの時間が、ここで言う「休暇」のように、一種のアジール(8)として機能することは期待できるのではなかろうか。ただし、この案を以てもなお、哲学プラクティスの時間内における過度な規範の破壊のリスクは除去できていない。実際、ロボット発言事件(9)のように大きな問題となった例がある。これは旧い話ではなく、昨年も死に関する哲学対話で同様の問題が起きたことを確認している。つまり、一部の哲学対話の「なんでも語ってよい」という原則が、既存の権力構造を解体し言葉の排除性の問題を乗り越える可能性を秘める一方で、守られるべき人権などまで解体することでむしろ排除を促進してしまっている(10)。議論を、それを成り立たせている基盤から問い直すメタ的な議論は、このようなリスクを有していることが認知されてはきているものの、どのようにバランスをとって調停すればよいかについては未だ検討の途上である（e.g. Breakey 2021）。

最後に、本論文が持つ含意を二点付け加えて結びとしたい。

第一に、バフチンによる対話的教育実践批判についてである。バフチンは、ソクラテス的な意味で、対話は本来的に「対話にくわわった人びとどうしのカーニヴァル的な無遠慮な関係、人びとのあいだのあらゆる距離の廃棄を前提としており、さらには、いかに高尚で重要なものであれ思考対象そのもの、また真理そのものへの無遠慮な関係を前提としてい」たはずであるのに（詩学: 227）、教育のための形式的な問答に成り下がったことで、対話はこのような「カーニヴァル的な世界感覚との結びつき」――通常・一般的と見做される公式の世界の秩序を廃止する機能――を「すっかり失って」しまったと批判していた（Ibid.: 227）。だが、本論文で見た愚者的・道化的他者性を損なわない教育実践に限れば、哲学プラクティスはすでにこの批判を超克しつつあるとも言いうるのではなかろうか。

第二に、哲学対話とディベートの布置についてである。哲学対話などの実践が、一部、ディベートを批判することで自らの位置と価値を明瞭にしてきたことは、すでに第 4 節の冒頭で述べた。しかし、第 1 節で触れたように、哲学対話のなかでもリップマンのように論理的な側面の強いものもあれば、第 4 節で触れたように、ディベートのなかでもクリティークのように論理的な側面の強くないものもある。加えて、これらの議論の時系列的な流れに即して言えば、次のことが指摘できる。すなわち、哲学対話とディベートはしばしば二項対立的に語られるが、どちらも、第一に「言葉の排除性という観点からの課題が指摘され認識が広がってきた」という点で（第 1 節で触れたリップマン批判／哲学プラクティス側から投げかけられてきたディベート批判）、第二に「この課題を乗り越えようとする実践が広がってきている」という点で（第 3 節／第 4 節）、軌を一にしていると言える(11)。従来認識されてきた相違に加え、この共通の志向性を踏まえることで、これら教育実践を哲学プラクティスの観点から止揚していく可能性もまた拓かれたと言えよう。いわば、これらの言葉に係る教育たちは、共闘して言葉の排除性に抗っていかなければならない。

【註】

(1) この理論に依拠する本論文は、いわゆるイデオロギー批判――ある制度の外部にあるイデオロギーがどのように階級的利害関係を隠蔽しているかという観点に重きを置く批判――にとどまらず（丸山 1986: 70-71)、むしろそのような階級的利害関係が内側に入り込んでいるものとして言葉を理解することで、言葉の排除性という問題を射程に捉える。

(2) 急いで付記しなければならないのは、「愚者（Шут, fool)」は決して「愚か」であることを意味しないことである。むしろ、新たな世界への可能性を切り拓く存在として描かれている。たとえばタロットにおいて、「愚者」のカードがまっさらを表す第 0 番であり、その正位置が「自由」「可能性」などポジティブな意味であるとおりである。バフチンの議論においてもそうであるし、愚者・道化研究を世界的に開かれたものにしたカイザーも「愚」を「知恵」の上位概念として位置付けたうえで（高山 1987: 236-237)、「愚者はまさにその性質からして偶像破壊的なのであり、ただ単に不敬であるというより、そもそもそこに権威が依拠するところの諸前提を理解することができないという点で、権威を覆滅するポテンシャルを秘めている」と述べている通りである（カイザー1968=1987: 50)。

(3) 「てつがく」の授業については、お茶の水女子大学附属小学校（2019）や森田（2021）参照。

(4) 永井が続けて「しかしながら繰り返しになるが、だからといって傷つきあうことや修正を行うことを拒絶する子どもの哲学は、当然『探求の共同体』ではあり得ない」と述べていることにも注意が必要である。このことについて、本論文は第 5 節にて、残された課題の 2 点目として言及する。

(5) 及川によれば、哲学カフェでの対話においても、言語行為論的に「不適切」とされる発言も許容されているという。たとえば、言いよどんだり上手く言葉にできなかったりすること（誤実行）や、当初の自分の発言について逡巡したり覆したりすること（不履行）は、言語行為論的には不適切という区分を与えられることになる。しかし、哲学カフェでの対話はこれを織り込み済みとすることで、発言が新たに解釈されなおす可能性が開かれていると論じている（及川 2020: 61-62)。

(6) 原語は次の通り。“Resolved: The United States Federal Government should substantially increase statutory and/or judicial restrictions on the war powers authority of the President of the United States in one or more of the following areas: targeted killing; indefinite detention; offensive cyber operations; or introducing United States Armed Forces into hostilities.”

(7) コービットは、「言語についても問題があった。伝統的なレトリックにおいて、効果的な言語スタイルというのは純粋で正しくて明瞭で適切で一般的なものであって、技術的なものではない。あの人たちのプレゼンテーションで用いられていた言語は、文法的な正しさ・明瞭さ・適切さを欠いていた。何度も『ニガー』と、ほとんどの場合不適切で受け入れがたいものであろう。加えて、この立論というのは、スラングや、スラムの詩や、唄によって作り上げられていた。」と批判する（Corbit 2017: 101-102)。たしかに、聴衆に伝わらないレベルでの語の誤用などは望ましくないだろう。しかし、まさにここで言われる「伝統的」で「一般的」な枠組みを破壊しようという試みに対しては、この批判は当たらないのではないか。コービットが持つような従来のディベート観から見た時に「不適切」と言われるような語りの形態にこそ、 隠

蔽された歴史性によって構成された力を崩したり、メタ的に悲痛な歴史・経験の「語りえなさ」を物語ったりする機能を、見出すことができるのではないか。

ところで、この可能性を踏まえると、本稿において筆者があえて文意がわかりやすいような形で和訳を試みていることもまた、〈翻訳〉の問題を孕んでいるのかもしれない。

(8) アジールは聖域を意味し、ギリシャ語の「ἄσυλον（不可侵、侵すことができない）」が語源である。アジール概念を先駆的に研究した第一人者と呼べる O.ヘンスラーは、法学・法制史の観点から、アジール法を「一人の人間が、特定の空間、人間、ないし時間と関係することによって、持続的あるいは一時的に不可侵なものとなる、その拘束力を備えた形態」と定義している（Henssler 1954=2010: 17）。教育学の領域では、より広い意味で、「ある人物の存立を危うくする力に抗して保護作用を及ぼしうるような、空間性、時間性、関係性などにかかわる要素」（山名 2015: 149-150）と捉えられたうえで、教育におけるその可能性と原理的な問題が検討されている。

(9) ロボット発言事件とは、「1999 年 5 月 21 日、植物状態の患者と看護師とのコミュニケーションに関する研究発表がされた際、大阪大学臨床哲学研究室の大学院生が『患者さんは、実は精密機械（ロボット）かもしれない』と発言したことで、看護関係者と哲学者とのあいだに衝突が生じた事件のこと」（大阪大学倫理学・臨床哲学研究室 第 5 回臨床哲学フォーラムパンフレットより）。

(10) 「一部の」と記したとおり、哲学対話全体を批判しているわけではない。ここでの主眼は、本論で愚者・道化論に即して見てきたとおり、「なんでも語ってよい」という原則についての批判的検討・問題提議である。数ある（言葉を交わす、という意味での）議論教育実践のなかで、比較的このような原則を標榜することの多いものとして哲学対話を取り上げたまでであり、むしろこのような原則を問題視する哲学プラクティショナーの存在も認識している。ここにおいては、哲学対話／ディベートといった区分は関係なく、協働してこの原則の両義性について今後さらに検討する必要があると考える。

(11) この指摘は、これらの実践の境界・分類を整える研究の重要性を否定する意図は全くない。

文献

Бахтин, М. М. (1929). *Проблемы творчества Достоевского*, Прибой, Ленинград.（バフチン著、桑野隆訳 (2013)『ドストエフスキー創作の問題』平凡社）

Бахтин, М. М. (1929). *Марксизм и философия языка: основные проблемы социологического метода в науке о языке*. Ленинград.（バフチン著、桑野隆訳 (1989)『マルクス主義と言語哲学––言語学における社会学的方法の基本的問題』未来社【略記：マル】）

Бахтин, М. М. (1963). *Проблемы поэтики Достоевского*. Москва.（バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳 (1995)『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房【略記：詩学】）

Бахтин, М. М. (1975). *Вопросы литературы и эстетики*.（バフチン著、北岡誠司訳 (1987)『小説の時空間』新時代社【略記：時空間】）

Бахтин, М. М. (1975). *Слово в романе Из предыстории романного слова*. Москва.（バフチン著、伊藤一郎訳 (1996)『小説の言葉』平凡社【略記：言葉】）

Biesta, G. (2017). “Touching the soul? Exploring an alternative outlook for

philosophical work with children and young people". *Childhood & Philosophy*, Vol. 13, pp. 415-452.

Breakey, H. (2021). "That's Unhelpful, Harmful and Offensive!" Epistemic and Ethical Concerns with Meta-Argument Allegations." *Argumentation*, Vol. 35 (3), pp. 389-408.

CEDA. (2014). https://cedadebate.org/history/ceda-topic-archive/

Corbit, Ken W. (2017). "A theory-centered model of debate assessment: the rhetorical judging paradigm". PhD Thesis, University of Alabama Libraries.

遠藤秀将 (2021)「『ガルガンチュワとパンタグリュエル』における対話--「グロテスク・リアリズム」に基づいたラブレーの教育思想」東京大学大学院修士学位論文

Henssler, O. (1954). *Formen des Asylrechts und ihre Verbreitung bei den Germanen.* （ヘンスラー著、舟木徹男訳（2010）『アジール--その歴史と諸形態』国書刊行会）

堀越耀介 (2020)「子どもとする哲学（P4C）における教師の役割と権威性」『思考と対話』Vol. 2, pp. 38-49.

Kaiser, W. (1968). "Wisdom of the Fool". Philip P. Wiener. ed. *Dictionary of the history of Ideas. Studies of Selected Pivotal Ideas.* New York, Charles Scribner's Sons. （カイザー著、高山宏ら訳 (1987)「愚者の知恵」、コーリー, R.L.ら編『愚者の知恵』平凡社）

梶谷真司 (2018)『考えるとはどういうことか』幻冬舎

河野哲也 (2014)「対話による人間の回復：当事者研究と哲学対話」『社会福祉研紀要』Vol. 33, pp. 3-12.

北田暁大 (2010)「熟議と排除　社会的装置としての熟議」『政治の発見 5　語る--熟議／対話の政治学』風行社，pp. 103-35.

Kraft, Jessica Carew. (2014). "Hacking Traditional College Debate's White-Privilege Problem". *The Atlantic.*

桑野隆 (2020)『[増補] バフチン　カーニヴァル・対話・笑い』平凡社

丸橋静香 (2019)「理性的な話し合いと〈他者〉-『教えること』の重要性-」『近代教育フォーラム』Vol. 28, pp. 67-72.

丸山真男 (1986)『「文明論之概略」を読む　下』岩波書店

ましこひでのり（2014）『ことばの政治社会学』三元社

森田伸子 (2011)『子どもと哲学を　問いから希望へ』勁草書房

森田伸子 (2021)『哲学から〈てつがく〉へ！』勁草書房

Morteza, Khosronejad & Soudabeh, Shokrollahzadeh. (2018). "The Quest For Meaning And The Basis Of Dialogue In P4C: An Attempt To Develop A Theory Of Dialogic Teaching And Learning." *Studies in Learning and Instruction (Journal of Social Sciences and Humanities of Shiraz University).* Vol. 10 (1). pp. 56-93.

永井玲衣 (2019)「探求の共同体における脆さと自己受容感覚」『思考と対話』Vol. 1, pp. 34-44.

西口光一 (2012)「言語活動従事に関与している知識は何か：バフチンの対話論の視点『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』Vol. 16, pp. 51-62.

お茶の水女子大学附属小学校 (2019)『新教科「てつがく」の挑戦-"考え議論する"道徳教

育への提言』東洋館出版社
及川一郎 (2020)「言明は発語内行為のひとつに過ぎないのか--哲学カフェにおける言明の特徴とは--」『思考と対話』Vol. 2, pp. 50-65.
酒井雅子 (2013)「M.リップマンの『子供のための哲学』における探求力」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』Vol. 21 (1), pp. 129-139.
Schmitz, J. R. (2013). “The native speaker and nonnative speaker debate” *Calidoschópio,* Vol. 11, pp. 135-152.
田島充士 (2018)「【講演記録】教育実践を理解するためのバフチン・ダイアローグ論　豊かな異文化交流の実現」『言語文化教育研究』Vol. 16, pp. 260-278.
高山宏 (1987)「『愚者の知恵』について」、コーリー, R.L.ら編『愚者の知恵』平凡社
Todorov, T. (1981). *Mikhaïl Bakhtine Le Princepe Dialogue suivide Écrits du Cercle de Bakhtine*. Paris, Éditions du Seuil. （トドロフ, T.著、大谷尚文訳（2001）『ミハイル・バフチン　対話の原理　付 バフチン・サークルの著作』法政大学出版局）
山名淳（2015）『都市とアーキテクチャの教育思想』勁草書房

＊ 本研究は、東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）2021 年度若手研究者育成プロジェクトの助成を受けたものであり、本論文は、当該プロジェクトの最終報告書であるワーキングペーパー「問い自体を議論の対象とする議論教育」の第 2 節を発展させたものです。
＊ 遠藤秀将氏には、氏の論文に触発されて本研究に至ったほか、本論文執筆にあたって多くの有益な助言もいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。